JAPAN ICOMOS / INFORMATION

INTERNATIONAL COUNCIL ON MONUMENTS AND SITES
JAPANESE NATIONAL COMMITTEE 日本イコモス国内委員会

7期 —10号

2009.7.10

CONTENTS ♣

はじめに／前野まさる 01
From the President / Masaru MAENO

2009年次第1回拡大理事会報告（3/28）／赤坂 信 02
Report of the 1st Meeting of the Executive Board, 28th March 2009 / Makoto AKASAKA

ルーマニアCIAV報告／前野まさる 06
Report of the Meeting of CIAV in Rumania 2009 / Masaru MAENO

世界遺産国際交流シンポジウム2009の開催／杉尾邦江 06
International Symposium of World Heritage in Kishu Japan, 2009 / Kunie SUGIO

イクロムの活動と文化財保護における国際分野の動向／金井 健 07
ICCROM Activities and Trends in International Field of Conservation for Cultural Properties / Ken KANAI

国際規格ISO13822（既存構造物の評価）に歴史建造物評価の動き（その2）／岩崎好規 09
A Note on the standardization of Annex I; Heritage Structure, ISO13822 Bases for design of structures- Assessment of existing Structures / Yoshinori IWASAKI

第9，10，11小委員会の報告／主査：三宅理一、窪寺 茂、岡田保良 10
Reports of the 9th, 10th and 11th Subcommittees of Japan ICOMOS / Riichi MIYAKE, Shigeru KUBODERA, Yasuyoshi OKADA

ハノイのタンロン遺跡の調査研究報告／上野邦一 11
Research Report of Thang Long Site in Hanoi / Kunikazu UENO

景観の日のイベントで／高木浩志 12
At the Event of the Day for Landscapes / Hiroshi TAKAGI

日本造園学会2009年大会での文化的景観の討議／村松保枝 12
Discussion on the Cultural Landscapes at JILA2009 / Yasue MURAMATSU

お知らせ 13
Announcements

事務局日誌 14
Diary

はじめに

前野まさる

昨年のカナダのケベック市で開催された第16回ICOMOS総会後、新委員長のGUSTAVO ARAOZ氏は昨年暮れに早速、「鞆の浦」の埋立架橋計画の中止と港湾遺産の保存に付いて、日本政府、広島県と福山市に要請書をお送り下さいました。同氏はWorld Monuments Fundにも関係されていて、常に広く世界の文化遺産に目を光らせている方で、鞆の浦問題にも強い関心をもたれています。先日の「日本の景観を良くする国民運動推進会議」主催のイベントで金子国土交通大臣が「安直に近代化に走ることには慎重になる必要がある」と発言され、歴史的景観保全に強い関心を示されましたのも、市民10万人の署名運動は勿論、こうした国際的関心と軌を一にするものと思います。

本年は9月にIFLA：文化的景観の国際会議の開催と、10月のCIIC国際カルチュラルルート委員会が三重県で開催される予定で、その準備が進んでいます。CIPAの会議も10月に京都で開催されます。また、アジア太平洋地域のRegional Meetingの日本開催も求められており、その対応も準備しなければなりません。これらの会議を成功させるためにも日本イコモスの皆さん方のお力添えをお願いいたします。

JAPAN ICOMOS/INFORMATION発行の遅れについてお詫び

本号の発行が大幅に遅れました。通常ならば、拡大理事会前に発行し、会議資料として使用されるものでした。この点大変ご迷惑をかけました。また会誌をお待ちの会員のみなさまに対しても心からお詫びを申し上げます。 （編集担当理事：赤坂 信）

2009年次第1回拡大理事会報告

2009年次第1回理事会（拡大理事会）が去る2008年3月28日(土) 13：00から16:15まで文化財保存計画協会地下会議室（東京都千代田区一ツ橋）で開催された。

出席者は、委員長：前野まさる、副委員長：杉尾伸太郎、理事：杉尾邦江、清水真一、濱崎一志、矢野和之、本部執行役員：岡田保良、小委員会主査：三宅理一、ISC委員：花里利一、大野渉、福川裕一、顧問：伊藤延男、オブザーバー：佐々波秀彦の各氏が出席、事務局から舘崎麻衣子、山内奈美子両氏が陪席した。報告事項、審議事項、協議事項は以下の通りである。

審議事項

1．入退会者の承認

審議の結果、以下の入会者と退会者が承認された。

1）入会者

個人会員

氏名	所属	専門分野	推薦者
田中 和彦（たなか かずひこ）	上智大学 アジア文化研究所 非常勤講師	東南アジア考古学（ﾌｨﾘﾋﾟﾝ考古学）、人類学博士	岸本雅敏・菊池誠一
馬場 良治（ばば りょうじ）	日本美術院 院友	建造物彩色、芸術学修士	矢野和之・窪寺　茂
小風 秀雅（こかぜ ひでまさ）	お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科　教授	歴史学・経済史学・地域学、文学博士	岡田保良・前野まさる
井上 典子（いのうえ のりこ）	文化庁 記念物課 文化的景観部門 文化財調査官	地域計画・文化的景観	矢野和之・前野まさる
中越 信和（なかごし のぶかず）	広島大学大学院 国際協力研究科 教授	生態学、理学博士	矢野和之・前野まさる

国内維持会員

組織名	代表者名	業務内容・専門分野	推薦者
テック大洋興業株式会社	鳥潟 浩司	景観材料・都市環境・公園施設製造	杉尾伸太郎・矢野和之

2）退会者

個人会員

氏名	専門分野	退会理由
牛川 善幸（うしかわ よしゆき）	造園学、庭園史	ご逝去（2009年2月16日）

維持会員　　なし

日本イコモス国内委員会　会員数（今回の入退会者を含む）

個人 353 + 5 − 1 = 357名　維持会員 14 + 1社 = 15社

協議事項

1．2009年次拡大理事会の日程・場所案

以下の日程が矢野事務局長から提案され、了承された。第2回・第3回拡大理事会のどちらかは、関西方面で開催することとし、場所詳細については引き続き調整を行なう。改選や法人化に向けた課題などがあるため、このほか臨時理事会の召集も想定されることが確認された。

(1) 第1回拡大理事会 3月28日(土)　東京

(2) 第2回拡大理事会 6月13日(土)　東京

(3) 第3回拡大理事会 9月19日(土)　奈良（検討中）

(4) 第4回拡大理事会・総会 12月12日(土)　東京

2．主催・共催・後援について

矢野事務局長より、以下の研究会と名義使用依頼について提示され、了承された。

1）イコモス主催研究会開催

日　程：4月5日(日) または4月6日(月)

場　所：岩波書店一ツ橋ビル　地下1F会議室

テーマ：世界遺産条約のマネジメントとイコモスの役割に関する課題

(元パリ本部イコモス事務局長　ハーブ・ストーベル氏

を囲んで)

3月28日の理事会開催後に予定されていた研究会を中止し、4月5日または4月6日に実施する旨、報告があった。当初のテーマは、2月に行なわれたユネスコワークショップに関する報告であったが、調整が間に合わなかった。

2）特別協力依頼

企画名：日韓交流イベント『チャン・グンソク in 熊野古道』

主　催：(財)民族芸術交流財団

日時・場所：2009年5月26日(火) 東京・JCBホール

5月29日(金) 大阪・グランキューブ大阪メインホール

18：30開演（17：00開場）

三重県、和歌山県も後援の予定であり、今年については了承し、感謝状については事務局に一任されることが併せて了承された。

＊5月29日(金) 大阪公演については、新型インフルエンザの影響により中止。

3．国立歴史民俗博物館企画展とのタイアップについて

伊藤延男顧問から、歴博企画展「日本の建築は特異なのか―東アジアの宮殿・寺院・住宅―」(会期：6月30日(火) ～8月30日(日)) の開催に際し、日本イコモスとしてタイアップして中・韓の専門家を呼んで研究会など開けないかということが提案され、事務局が玉井哲雄教授と連絡を取った。

韓国より1名、中国より1名の専門家の招聘について考えられることが事務局長より提案された。理事からは、木と彩色の小委員会と関係させてもいいのではないかという意見も出された。

4．会員制度（学生会員・個人維持会員 等）について

岡田保良本部執行役員より、会員制度について以下の提案があった。

「パリ本部ではYoung Professionalの活躍に期待が高まっており、日本においてもYoung Professionalを対象とした活躍・研修の機会を増やす取り組みを進めることが求められている。そのためにも現在の会員制度に加え、学生会員を増設することが必要ではないか。また、年を経て学生になった年長学生や現役社会人でかつ学生だったりする方や、専門家ではないが支援したい方についても会員資格のガイドラインが必要かと思われる」この件については、次回理事会に具体的な案を提示していただき、引き続き検討することとなった。

5．公益法人化について

矢野事務局長より、公益法人への移行申請について説明があった。法人化による事務局の負担増加が予測され、その対策についても検討の必要がある。引き続き、具体的な内容を精査し、報告・協議を行なうことになった。

6．イコモス会員特典について

矢野事務局長より、かねてより懸案となっている日本国内の博物館や世界遺産登録物件の入場料・見学料をイコモス会員については無料になるような活動を行なう旨、提案があった。担当者を決定し、交渉を行なうと同時に、諸外国の実情を調査することが検討された。また、海外ではICOM（国際博物館会議）とICOMOSの連携が進んでいる旨の意見があり、日本においても今後連携を高める事も併せて協議していくこととなった。

7．新小委員会設置について

佐々波秀彦氏より、第11小委員会「歴史的都市のマスタープランに関する研究」設立の提案があった。歴史的都市のマスタープランの検討を通じて，より適切な景観保存のための土地利用規制（バッファーゾーンを含む）の提案を企図している。2009・2010年は原爆ドーム周辺地域と百舌鳥・古市古墳群周辺地域を課題としたいとの提案があった。収集した情報を国内委員会のアーカイブに記載し利用をはかることなどについて更に検討し、報告することを条件として、了承さ

れた。

8．CIVVIH （the International Committee on Historic Towns and Villages）指名選挙会員の選出について

CIVVIHより、各国からの指名選挙人について、イコモス国内委員会より代表者氏名を連絡する旨、依頼があった。日本からは、引き続き、福川裕一氏が指名選挙人として、メンバー登録されることが了承された。

9．木の委員会

木の委員会委員長から執行委員を推薦してほしいとの依頼があった。渡邊保弘氏にお願いすることとなった。

1．2008年12月13日　2008年拡大理事会・総会報告

前野委員長から報告があった。詳細はINFORMATION誌7—9を参照のこと。

2．小委員会報告

第5小委員会：（プロヴディヴ）工事はすでに終了した。5月に視察の予定（矢野和之）

第6小委員会：（鞆ノ浦問題）「『鞆の浦』埋立て差し止め訴訟」結審等について（矢野和之）

第10小委員会：（彩色修理）設立について（矢野和之）　詳細はINFOMATION誌7—9, p.13参照のこと。

3．本部執行委員会（2月6～7日）の報告

岡田保良本部執行役員から以下の報告があった。

1）昨年、ケベックの諮問委員会で選出された副委員長が辞任した。コルビジェの建築を世界遺産にするための審査に不手際があったとのこと。

2）イコモスの予算は一億数千万円の規模であるが、65%はユネスコからの委託によるものであり、相当厳しい。

3）次回の諮問委員会は10月7～11日マルタのバレッタで開催されることとなった。

4．世界遺産国際交流シンポジウム開催について

杉尾邦江理事より、三重県の伊勢市にて開催される世界遺産交流シンポジウムの内容や日程について報告があった。本シンポジウム開催にあたり、独立行政法人　国際交流基金の助成申請が受理された旨連絡があった。財団法人　文化財保護・芸術研究助成財団の結果は4月半ばにわかる予定である。

5．ISCEAH (International Scientific Committee on Earthen Architectural Heritage) meeting Mediterra 2009（3月13～16日　於サルデーニャ）の報告

岡田保良本部執行役員より、地中海域の「土の建築」の研究会がイタリア・サルディニアで開催され、70本の研究報告と100名の参加者があったことが報告された。土の建築の再評価が歴史的な視点からだけではなく、エコロジカルな視点から注目を集めていることもあわせて報告された。

6．ISC Rock Artの報告

五十嵐ジャンヌ氏より、2008年12月に台北の十三行博物館で萬山岩雕遺跡に関する情報を収集し，2009年1月には鹿児島県徳之島で線刻画の調査・記録を行なったこと、2009年6月ブラジル・ピアウイ州のセラ・ダ・カピバラ国立公園にて岩面画国際会議が開催されることなどが報告された。

7．2008年文化遺産国際協力コンソーシアム運営委員会報告

日本イコモス国内委員会は、「文化遺産国際協力コンソーシアム」運営委員会の構成員であるので、去る3月19日に開催された運営委員会の報告が行なわれた。清水真一氏からは、日本イコモス国内委員会の会員組織編制の参考として、本運営委員会にて規約が改訂された学生会員制度について説明があった。

8．木の委員会支援基金への寄付

矢野和之事務局長より、木の委員会支援基金へ伊藤延男顧問よりご寄付いただいた旨、報告があった。また、木の委員会は、Voting memberを渡邊保弘氏とし、その他土本俊和氏が活動することとなった。

9．訃報　堀内清治先生ご逝去

熊本大学名誉教授の堀内清治先生が、2009年3月24日午前6時29分に肺癌のためご逝去された旨、報告された。故人のご冥福をお祈りする。

10．イコモス諮問委員会委員長Jon Hurd氏講演会報告（岡田保良）

The ICOMOS approach to and involvement in the World Heritage sites process

／国士舘大学アジア・日本研究センター研究会（AJフォーラム）講演会（日本イコモス後援事業）について紹介があった。

11．三重大学 エクアドルからの国費留学生の博士学位論文の紹介

花里利一氏より、以下の論文がイコモスに寄贈された。

論文テーマ：『エクアドルのキト市の世界遺産保全制度に関する研究－エクアドル（クエンカ市）及び日本（奈良市・京都市）の経験をふまえたキト市の世界遺産保全制度の改善』

12.「第2次21世紀の朝鮮通信使」のご案内

前野まさる委員長より、4月1日から5月20日（50日間）開催される「ソウル－東京　日韓友情ウォーク」の東京到着パーティー（5月20日　虎ノ門パレスホテル）について案内があった。

13．ハノイのタンロン遺跡の調査研究報告

上野邦一氏より、書面にて、ここ数年、ハノイのタンロン遺跡の調査研究をベトナム側研究者と共同で進めており、ベトナム政府はこの遺跡を2010年に世界遺産登録することを目指して活動を行なっている旨、報告があった。詳細については、本誌p.11を参照されたい。

14．後援について（矢野和之）

以下の後援依頼について、2009年2月18日付で事務局より、承諾書面を郵送した。

行事名：第2回サイバー大学巡研・狭山池　シンポジウム“古代の土構造とその保存”」

日　程：2009年3月28日

共　催：大阪府狭山池博物館、サイバー大学世界遺産学部、財）地域地盤環境研究所

15．文化的景観ISC（国際学術委員会）

ICOMOS/INFORMATION誌7—9, p.10で報告したフランスのロワール地方において予定していた作業会合は中止と、イタリアのミラノで開催されることとなった。

16．その他

- 日本各地における世界遺産動向が報告された。
- 社団法人 日本ユネスコ協会連盟より、『世界遺産年報2009』受領の報告があった。

国際学術委員会（ISC）ニュース

ルーマニアCIAV報告

前野まさる

ISCのCIAV会議は毎年各国持ち回りで開催されており、本年はルーマニアの中心部の町リメテアで5月22～23日の両日開催された。CIAV委員は全員19日にルーマニアの第2の都市シビウに集合し、翌20日、バスで2日かけてCIAV会場のリメテアに向かった。途中、民家、教会、城跡、金鉱跡などの歴史的遺産を視察した。

ルーマニアは長い歴史の中で周辺国家の支配を受け、それらの殖民が築いた歴史がこれら遺跡の複雑さと特徴を創り出している。ルーマニアの民家は共通して60度ほどの急勾配の屋根で、ドイツ系の民家は切り妻屋根で、ハンガリー系のものは切り妻の棟の所をチョット入母屋的にする兜屋根的なものが大勢を占めている。また、屋根の下り面にある小窓はむくり屋根に小窓があり何か人の目のようでチョット気を引かれる。こうした周辺諸国による侵略の歴史の中に城郭のある町がある。この城郭は一般的な城郭ではなく、外敵が攻めて来た時の住民の避難所として設けられたもので、この国の歴史的環境を良く伝えている。

教会建築はルーマニア正教会が90%を占めているようだが、この他ギリシャ正教会、ロシア正教会、ローマンカトリックなどが小さな町にあり、それぞれがきちんと管理されている様子から信心の深さを感ずる。

22日と23日はルーマニア中心部の町リメテア郊外のホテルで行なわれた。ホテルの周辺は広い牧草地で、その先には山岳地帯が広がる良い風景の場所である。CIAVの会場はホテルの食堂に椅子を並べた臨時のものであった。参加国は18カ国から約30人、ルーマニアからは約80人程の参加があった。両日の研究発表はルーマニア民家が大半を占め、その他ヨーロッパの民家保存の状況、アジアはフィリピンと韓国の民家について紹介があり、私は2004年にCIAVが「鞆の浦」の歴史的港湾保存の要請をした後、CIAV、ICOMOSが福山市、広島県、日本政府に出された要請、決議等のその後の状況を報告し、併せて謝礼を申し上げた。

前CIAV委員長のChristoph Machat氏はこの地方出身のドイツ系住民で、ルーマニアが共産化した時にドイツに移住し、共産政権崩壊後ルーマニアの歴史的集落の調査と保存に尽くしたと云う。今回のCIAV会議の企画にはMachat氏の企画が大きく働いていた。

世界遺産国際交流シンポジウムの開催

杉尾邦江

日本イコモス国内委員会は「世界平和の構築を考える世界遺産国際交流シンポジウム2009」を開催いたします。

この世界遺産国際交流シンポジウムは世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」登録5周年を記念して、日本イコモス国内委員会、イコモス国際学術委員会カルチュラルルート委員会（CIIC）、三重県が共同して実施いたします。また併せて三重県が主催する参詣道の「伊勢路（熊野古道）国際交流シンポジウム」にも日本イコモス国内委員会とCIICが協力いたします。なお、イコモス国内委員会会員、世界遺産関係者、専門家、一般の方も含めて本シンポジウムに奮ってご参加くださるようお願いいたします。参加お申し込み等についての詳細は追って皆様にご通知いたします。また本件についてのご質問等ございましたら日本イコモス国内委員会事務局までお問い合わせ下さい。

記

1.「世界平和の構築を考える世界遺産国際交流シンポジウム」の概要

2008年10月カナダのケベックで開催された第16回イコモス総会で採択された「カルチュラルルート憲章」で示された世界遺産の登録に今後期待される世界平和

の達成をテーマにイコモスの会員、CIICのメンバー、日本イコモス国内委員会等の専門家が結集、討議交流を図ります。会議シンポジウムの成果として参加者全員によって「世界遺産平和宣言」を起草し、世界に向けて宣言します。

2. 開催日

平成21年11月1日(日) 9：00～19：00

3. 開催場所

賓日館（伊勢市二見町）定員300名　一般参加（申し込み制）

4. プログラム（概略）

9：00　開催挨拶

文化庁、三重県知事、イコモス会長他

9：30～　基調講演

1）これからの世界遺産に期待される新たな価値

イコモス会長　Gustavo Araoz氏

2）カルチュラルルート、シリアルノミネーション等の特異な遺産の意義と世界平和構築への期待

CIIC会長　Maria Roza Suarez氏

10：00～18：00　シンポジウム　講演

1）第1部　テーマ“新しい特異世界遺産の概念と世界平和構築への可能性”

講演者：日本イコモスメンバー　3名

CIICメンバー　3名

2）第2部　テーマ“事例、実証”

講演者：日本イコモスメンバー4名、

CIICメンバー7名

3）第3部　交流ディスカッション

18：00～18：30

4）第4部　平和宣言

19：00～　レセプション（一般参加者は有料）

イクロムの活動と文化財保護における国際分野の動向

金井　健

平成20年（2008）4月より、文化庁派遣の職員としてローマにある文化財保存修復研究国際センター（ICCROM：イクロム）に赴任している。国際分野の文化財保護活動といえば、すぐにユネスコの世界遺産が想起されるが、ほかにも様々な活動が様々な地域で活発に行なわれており、イクロムの活動はそうした文化財保護に関する国際的な動向において重要な位置を占めている。このようなイクロムが関わる文化財保護の活動は日本国内で文化財保護分野に携わっていても具体的に関係する機会は稀であるが、実際に関わってみると日本の文化財保護分野と国際分野の関係について考えさせられることも多くある。以下、この点について若干の所感を記しておきたい。

イクロムは昭和34年(1959）に設立された加盟国の合意に基づき運営される政府間機構であり、ユネスコおよびイコモス、イコムとともに文化財保護の国際的な動向を主導する役割を担ってきた。20世紀以降、世界規模での交流が活発化する中で文化財保護は平和戦略の手段のひとつとみなされるようになり、文化財保護をあつかう国際機関の創設につながるが、なかでもイクロムの活動は、文化財保護の実践的・科学的な研究と研修コースの実施を通じて文化財保護の手法を理論化し、これを世界各国の文化財保護の専門家に敷延することで、いわば文化財保護分野の知識の近代化に大きく貢献してきた点が特に評価されよう。

日本は昭和42年(1967）の加盟以来、イクロム主催の研修に文化庁の職員が継続的に参加しているほか、昭和44年(1969）以来今まで一貫して理事を輩出し、イクロムの活動に対して資金面のみならず運営面からも関与してきた。また近年はイクロムとの共催により日本をフィールドとした研修コースや主にアジア太平洋地域を対象とした国際シンポジウムを定期的に開催し、さらに平成12年(2000）以降は文化庁から専門職

員をイクロムに派遣するなどあらたな展開もみせている。このように日本は現在126カ国を数える加盟国の中でもイクロムの活動に積極的に関わってきた国であり、ユネスコにおける日本の評価とあわせてみても、戦後の文化活動を軸とした国際社会への貢献は一定の成功をおさめているといって差し支えあるまい。

一方で現在の国際社会は歴史的・地理的な背景から西欧社会を中心に構築されてきたことは周知のところであり、その結果として国際的な組織は概ね西欧の言語および思考の枠組みを基盤として成り立っている。加盟国間の対等かつ自立した関係性を標榜する国際機関も無論その例外ではなく、例えば国際機関において実際の活動をになう専門職員は、西欧社会の高等教育を充分に受けていることが国際機関で活躍するための事実上の必要条件となっている。また国際機関が発する方針や勧告には西欧社会の風潮に追随する傾向が色濃く現れ出ることが多く、こうした国際機関のあり方が「西欧中心主義」として批判の対象となることもある。しかし西欧社会の中でも各国間あるいは地域間で同質の軋轢があるように、どのような社会においてもこうした中心と周縁のジレンマは多かれ少なかれ生じるものである。すなわち中心を志向するこうした社会の性格は、言語や思考方法といった基盤の共通化やリーダーシップの所在の明確性など社会が効率的に機能するうえで利点が多いことに起因する根本的なものであり、国際機関としては組織の理念上は解消したいが、現実的には解消が困難あるいは不可能なやっかいな問題となっている。

イクロムも設立以来、文化財保護の国際分野において西欧社会の理念を機軸としたリーダーシップを発揮してきたわけだが、国際的な文化財の概念は社会のグローバル化が進むほど、唯一無二の普遍的な存在から各国・各地域の個別な存在に拡張していき、また各国・各地域の文化財が相対化されることで、逆に文化財の評価の視点は文化財全体の求心的な相対評価から個々の文化財に対する多核的な絶対評価へと変遷してきた。同時にイクロムの活動も、組織的には「西欧中心主義」で推移しながらも、西欧社会に蓄積された文化財保護の知識や技術を世界に啓蒙するものから、世界各国間の交流を促進し文化財保護に対する多様な価値観を共有しようとするものへと変化してきた。そして設立50周年の節目を迎えた現在、イクロムの役割をこうした文化財保護の国際分野の潮流に沿って再定義することが急務として掲げられている。

こうしたイクロムの展望は、ここ50年間の世界情勢の変化に加えて交通や情報伝達の手段が飛躍的に向上したことで、国際交流のあり方がよりボーダーレスになったという前提にたっている。イクロムではフェローシップやインターンシップを通じて世界各地の研究者等を毎年15人前後受け入れている。また一時的な訪問者も加えれば相当な数の文化財保護の関係者がイクロムを通じて活発に交流しており、確かに国際社会に対しては今や指導よりも互助の役割が期待されていることが実感される。翻って日本に現状をみれば、今もなお日本社会と国際社会を別のものとして認識する傾向は根強く、日本社会が国際社会の一部としてではなく日本社会対国際社会というような構図で理解されることが少なくない。

これはひとつに日本社会がその地理的・文化的背景から国内の還流で充足される構造として成り立ち得てきたことの現れといえるが、同時にこうした日本独特の社会構造は国際社会において日本の国力が社会の実態以上に高く評価される一因にもなってきた。その意味で日本は、主に経済力に立脚した国際的な地位と内向きの社会構造の不均衡が際だった特殊な国であり、この矛盾が一種のコンプレックスとなって、日本社会が国際社会をひとくくりに相対化し、時に強く意識せざるをえない要因となってきた。

今後の日本社会の姿については悲観的な予測が多いのも事実だが、願わくは文化財保護が果たす役割がより期待されるような社会になってほしいし、国際社会の日本社会に対する期待や要求が今よりも弱まるならば、日本社会の対国際社会の意識をときほぐす好機となるのではなかろうか。だとすれば今後の日本社会においてイクロムやイコモスといった国際的な組織の存在意義も大きくなるであろうし、またその真価が問わ

れるように思えるのである。

サン・ミケーレ通りに建つイクロムのオフィス

国際規格 ISO13822（既存構造物の評価）に歴史建造物評価の動き（その２）

岩崎好規

遺産建築の安全性評価の国際基準を国際規格ISO13822（既存構造物の評価）の付属文書として追加する動きについては、東北大学三橋教授が主査となり、JPイコモスからは、三重大学花里教授と著者が、委員として参加して改定作業が進められていることは以前に報告しました。現在、その委員会原案に対する各国からの投票が2009年1月15日から同年4月15日まで実施され、その結果が出た状況にあります。投票の結果によれば、

賛成票（12ケ国）：ベルギー、カナダ、チェコスロバキア、フランス、日本、大韓民国、ノルウエイ、ポーランド、ロシア連邦、南アフリカ、スペイン、スエーデン、英国、

意見付賛成（1ケ国）ベルギー

棄権（3ケ国）ブルガリア、イスラエル、米国

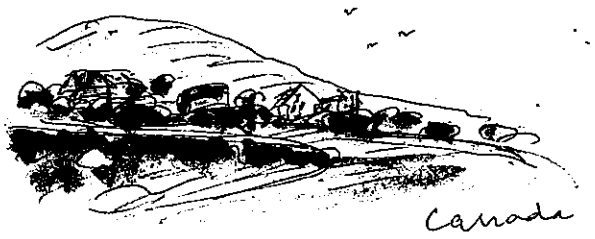
意見付棄権（1ケ国）イタリア

意見付賛成のベルギーは、「CEN（欧州規格）でも同様の作業をやっている」というコメントで、投票自体には影響を与えることはないが、欧州でも同じ目標でなにかやっているということは、ＩＳＯの委員会としては全く理解していない状況でした。棄権のイタリアの意見は、国際レベルでの規格は関心がないというものでした。今後、委員会原案（CD）が承認されたことから、委員会案をもとに、DIS（Draft of International Standard）を作成し、ISO中央事務局に送付して登録し、国際規格としての投票に移行することになります。

11月にオスロで開催される次回委員会までに、現在の原案に修正加筆できる機会は残されています。イコモス日本委員会を含め、ご関心のある方には、（ISO 13822 Annex I Heritage structures）の英語および日本語による対訳（案）をpdfとして、提供いたしますので、次のメールアドレスにご連絡ください。

yoshi-iw@geor.or.jp

（ISC修復のための建築解析委員会（ISCARSAH）委員）



イラスト／前野まさる

小委員会報告

第9小委員会（朝鮮通信使遺産）

主査　三宅理一

江戸時代を通して朝鮮王室から慶賀のための外交使節として江戸に派遣された朝鮮通信使の存在は，鎖国の時代といわれた江戸時代に東アジアの間で豊かな国際関係が築かれていたことを物語っており、近年、その歴史的評価の動きが日韓両国で高まっている。昨年2007年は朝鮮通信使発足400周年を迎え、それを記念して日韓各地で関連行事が繰り広げられた。日本イコモス国内委員会でも、日本建築学会、韓国建築歴史学会と共同で「朝鮮通信使の道」展を学会建築博物館で実施し、日韓の専門家を集めてこのテーマに取り組んだ。

「朝鮮通信使の道」は朝鮮通信使の往来のために整備された日韓にまたがるリニアな遺産のネットワークを指す。外交団を迎えるためにソウルから江戸に到る街道、海路沿いで都市整備、港湾整備がなされ、外交施設が多数建設された。実際、対馬藩が外交と貿易のための拠点として朝鮮国内に開いた釜山（草梁）の倭館（和館）は、日朝の技術者が共同で建設を行い、両国の技術と文化が混じり合った建築群であったことがわかっている。このように当時の建築・都市遺産は，江戸時代の文化交流を示す貴重な遺産であり、日韓を結ぶ共同遺産としてユネスコの世界遺産化が議論されるようになってきた。昨年のカナダ・ケベックにおけるICOMOS総会でもこの朝鮮通信使遺産が話題に上り、この問題を本格的に取り扱う時期に入ってきたと思われる。

ついては、朝鮮通信使に関わる遺産を日韓共同遺産として保護活用すべく、日本イコモス国内委員会に「朝鮮通信使遺産委員会」を設置し、韓国イコモス国内委員会と共同でその作業に当たることを提案する。
2008年度の活動はまだ初期的段階だったが、2009年には関連自治体、国際機関に対して積極的な働きかけを行ない、「朝鮮通信使遺産」をオーソライズしていく予定である。

第10小委員会（歴史的建造物における塗装修理の手法）

主査　窪寺　茂

2008年10月29日から11月1日にかけて、東アジアにおける木造建造物の彩色（彩画）保存に関する国際セミナー（「International Seminar on the Conservation of Painted Surfaces on the Wooden Structures in East Asia」）が中国北京市で開催された。

周知のとおり、中国は故宮などの建造物修理の方法、なかでも塗装修理の実施結果についてヨーロッパなどの専門家から批判を受けており、この問題の対処を東アジアの枠組みの中で行なおうとしている。今回の国際セミナー開催はその反映であり、中国国家文物局の主催、ユネスコ世界遺産センター、ICCROM、ICOMOS、ICOMOS中国の共催で実施され、日本、韓国、ベトナム、タイ、フィリピン、スリランカ、パキスタン、ブルガリア、ブラジル、アメリカ、フランスなどの専門家がこのセミナーに参加した。同セミナーでは、参加各国の塗装保護・修理の事例、塗装の保存修理原則、塗装（修理）技術の伝承の3つの観点からの発表と討論が活発に行なわれた。

ところで、塗装修理のみならず、歴史的建造物の保存修理の実際は、各国の歴史文化や保護体制、さらには建造物が置かれている環境・情況など、様々な要因によりその方針や実施方法に相違が見られる。したがって、東アジアの枠組みの中で今後塗装修理の方向性を検討する場合も、この点の認識が必要となることは言うまでもない。

では、この点に関する日本国内の現況はどうであるかというと、文化財建造物における塗装修理の実際は、近年塗り替えによる塗装修理が行われる傾向が比較的に多くなっている反面、現状を積極的に維持する修理方針も同時に採られ、さらには、塗装修理の方針や具

体的な修理方法に関する問題を再検討すべきであるとの意見も存在する。つまり、歴史的建造物における塗装修理の手法に関する関心は、日本国内においても近年高まりつつあるといってよいように思われる。

今後中国主導で検討されようとしている東アジアにおける建造物彩色の修理手法に関する問題に対して、日本も積極的に関わる必要があることは言うまでもないが、そのためには、この問題を国内問題として受け止めることが肝心であると考える。

そこで、これを契機に、日本のおける彩色を含めた塗装修理の手法に関する研究を行なうための専門家からなる委員会を、日本イコモスの国内小委員会として設置したい。

第11小委員会（歴史的都市のマスタープラン）

主査　岡田保良

ユネスコにより1975年に、世界文化・自然・複合・無形文化遺産登録事業が取り上げられてから、世界的に歴史的建造物や遺跡などの保存やそれに伴う周辺地域の整備等が、積極的に各国政府、公・民機関、学術・教育機関関係者、地元コミュニティ等で取り上げられ、我が国においても観光事業育成・振興を含めて、今日益々積極的に取り組まれている。

インターナショナルICOMOSは、ユネスコの諮問機関として、専門的・技術的な立場から各国より申請される世界文化遺産登録案件の評価に重要な役割を果たしてきている。ここで、UNESCOやインターナショナルICOMOSの設定した評価指標及び審査基準に関し、ジャパン ICOMOSとしても、情報交換や現地視察を通じて、その分野の専門的技術集団として、種々協力すべきである。特に、我が国からの世界文化遺産登録への応募プロジェクトに関しては、専門的立場から関係機関・関係者に助言することが可能であろう。特に景観保存に関連したバッファーゾーンの設定等は、対象都市の物的計画に密接に関係しており、各地方自治体が制定するマスタープランの中で、十分審議され、土地利用の指定が適切に行なわれることが重要である。

本第11研究分科会は、これらマスタープランの検討を通じて、より適切な景観保存のための土地利用規制の提案を企図している。

ハノイ・タンロン遺跡の調査と成果

上野邦一

ハノイ市街地の中心地であるバーディン地区で、李朝（1010-1224）をはじめ複数の王朝の時期に属する宮殿跡が発見された。上野と奈良文化財研究所の井上とが、この数年間折りをみて発掘現場に赴き、検出した遺構の解明作業をベトナム側考古学者と共同で行なってきた。調査の成果と、我々の活動を簡単に紹介する。

バーディン地区の一画に国会議事堂が建っていた。敷地を拡張して新たな国会議事堂へ建て替える話が明らかになり、建設予定敷地がもとのタンロン城中心地であることから、事前の発掘調査が実施されることになった。タンロンとは漢字表記で「昇龍」、このベトナム音であり、現在のハノイである。

発掘調査地はAからEまでの5つの区に分割されて調査が進んできた。発掘調査はA・B区の大部分、D区は半分ほど、C区は一部分で実施されている。紆余曲折があったが、新国会議事堂は、もとの敷地を東と北に20m拡張した敷地に建設されることとなった。A・B区の全域とC・D区に大部分は保護される。タンロンへの遷都が1010年であり、一時期首都でない時期もあるが、1000年の間ハノイは政治・経済・文化の中心であったことから、調査区域と、その東に隣接する都城中心の一画を2010年に世界遺産に登録しようとベトナム政府は活動を続けている。

建物跡は基礎地業というべきものが秩序だって並ぶもので、柱位置に穴を掘りそこにレンガ片、砂利、陶

磁器片などを入れ突き固めて礎石を据えたと考えられる。調査区域では建物の構造体を構成する壁の痕跡は認められず、タンロン遺跡の建物は軸組構造の木造建築群であった。遺構の解釈に混乱や間違いがあったが、数年間の共同調査の成果として、A・B・D区での李朝の建物配置をほぼ明らかにした。なおC区に巨大な八角形建物跡が出現している。創建東大寺の東西塔に匹敵する規模の多層建物であろう。新国会議事堂建設予定地E区で発掘調査が行なわれているが、外国人研究者には公開されていない。

遺物では、おびただしい量の陶磁器が出土していて、陶磁器の研究資料として一級品であろう。また、瓦・レンガの出土も多い。このうち日本で見られる通常の飾り瓦より大きい飾り瓦が大量に出土しているので、相当大きい建物が複数棟あったと考えるべきだろう。

タンロン遺跡の解明は、ベトナム都城史に画期的貢献をすると期待され、さらにインドシナ半島の古代史の解明にも寄与することになるだろう。

タンロンA区

タンロンB区

景観の日のイベントで

高木浩志

6月1日の景観の日に「日本の景観を良くする国民運動推進会議」（経団連ほか37団体加盟）の主催により「美しく風格のある国づくり」と題するイベントが開催された。会場は虎ノ門のニッショーホールで、およそ500人ほどの事前申込者だけで満席状態であった。冒頭、この行事の特別協力省庁として国土交通省、農林水産省、環境省が名を連ね、それぞれ大臣もしくは専門官等による挨拶があった。とりわけ金子一義国土交通大臣は、最近の景観行政の実績などにふれつつ、結びの言葉で鞆の浦に話が飛んだ。おそらく保存運動批判だろうと思っていたら、なんと正反対。こういう歴史的、文化的景観を私たちは大切にしていかねばならない。安直に近代化に走ることには慎重になる必要がある、と公言されて、盛大な拍手を受けていた。

まさにこういう人材こそ建設行政に相応しいし、今後の政治、行政に大きな影響を与えうるものだと期待したい。

日本造園学会2009年大会での文化的景観の討議

村松保枝

「文化的景観」に関連する学会発表及び総合討論について報告する。2009年5月24日(日)、明治大学にて、平成21年度日本造園学会全国大会研究発表会が行われた。「集落景観の保全と再生」に関わるセッションでは、4件の研究発表の後に、共通テーマとして「文化的景観の広がりと可能性、そして今後我々が為すべきこと」が挙げられ、会場の出席者とともに総合討論が行なわれた。（なお、ここで言う文化的景観とは、世界遺産条約に言う文化的景観を指す）

集落景観の保全と再生（座長：温井亨　東北芸術工科

大学)

演題名	著者
全国町並み保存連盟加盟団体の活動にみる保存の動機の変遷	村松保枝・赤坂信
妻籠宿における地形からみた水路網・土地利用と住民の保全意識	北原礼文・佐々木邦博・上原三知
白川村の「結い」と「屋根葺き替え」の変遷に関する研究	内海美佳・黒田乃生
奈良県の旧官幣大社における立地環境と空間構成の関係	浦崎真一

今回村松は、町並み保存に関する発表を行なった。全国の町並み保存に取り組む地域では、保存の対象を主に建造物群としながらも、自然環境も含むものもある。その一つの顕著な例として、妻籠宿を取り上げた。今回の発表の狙いとしては、現在までのところ主たる関心の対象が建造物群であるが、自然環境(森林)にも関心を広げたいという点である。妻籠宿には、宿場によって構成される町並みの周囲に、木曽ヒノキの山林がある。そうした山林は、1960年代後半以降の町並み保存の取り組み以来、保存の対象とされてはきたが、実際には、その多くが住民のものではない国有林が含まれている。その意味で住民自身がどれほど直接の関わりを持っていたのだろうか。それでは、なぜ、保存の対象として広大な森林面積をとったのか。その理由を知るためには、妻籠宿の住民にとってのヒノキ林によって構成される国有林像を明らかにする必要を感じた。

お知らせ

第22回CIPA国際シンポジウムin京都のご案内

これまでにもお知らせを差し上げて参りましたように、本年の10月に京都でCIPA 2009国際シンポジウムを下記の要領で開催いたします。論文アブストラクトの募集はすでに締め切りましたが、世界中から集う研究者、実務者の間で情報交換や交流を行なう絶好の機会でもありますので、ぜひご参加いただけますようお願い申し上げます。

シンポジウムの詳細につきましては、以下のウェブサイトをご覧ください。

CIPA2009京都のホームページ：

http://www.rgis.lt.ritsumei.ac.jp/cipa2009/

(参考URL：CIPAのホームページ　http://cipa.icomos.org/)

CIPA2009京都シンポジウム

運営委員長　高瀬 裕

記

時　期：2009年10月11日（日）～15日（木）（日本写真測量学会（同年10月13日～15日）と同時期開催）

場　所：京都テルサ

主　催：CIPA (International Committee for Documentation of Cultural Heritage) 共　催：日本写真測量学会、動体計測研究会（ARIDA）、立命館大学　他

後　援：ICOMOS (International Council on Monuments and Sites)

ISPRS (International Society for Photogrammetry and Remote Sensing)

日本イコモス国内委員会、情報通信研究機構、奈良文化財研究所、福武学術文化振興財団、テレコム先端技術研究支援センター、日本測量協会　他

言　語：英語

参加者：世界各国から200名、国内から100名、計300名（見込）

登　録：全部参加者、学生・同伴者、1日券

シンポジウムの主要テーマ：

文化遺産のデジタル記録とドキュメンテーション、文化遺産の修復・保存におけるICT技術利用、デジタルアーカイブ、文化遺産のデジタル写真測量、文化遺産の地上および航空レーザー計測、文化財防災、デジタル考古学、GIS・バーチャル歴史都市、ドキュメンテーションの標準化、知的所有権・オープンソース、および上記に関連する3次元モデリング、ビジュアライゼーション・CG・VR・MR・Web技術、教育・コミュニケーション、画像処理技術、センサー技術など

出展募集中：

シンポジウムの期間中、会場におきまして企業と研究機関による展示を催します。文化遺産関連の測量、調査、3次元計測、GIS、GPS、CG/VR/Web技術、リモートセンシング、画像処理など、および上記に関連するシステム、ハードウェア、ソフトウェア、研究成果などが対象となります。

(お問合せ先：日本写真測量学会事務局　藤野

office-jsprs@jsprs.jp まで)

事務局日誌

（2009年3月1日～2009年5月31日）

3/18	(財)ユネスコ・アジア文化センターより「ACCU news no. 372、 2008.3月号」を受領
3/23	関西大学　文化財保存修復研究拠点より「News Letter No. 1」を受領
3/27	【JAPAN ICOMOS INFORMATION】第7期9号発行、会員に順次発送
3/28	2009年次第1回拡大理事会開催（於 岩波書店一ツ橋ビル 地下1F 会議室）。花里利一氏より、三重大学エクアドルからの国費留学生博士学位論文「エクアドルのキト市の世界遺産保全制度に関する研究ーエクアドル（クエンカ市）及び日本（奈良市・京都市）の経験をふまえたキト市の世界遺産保全制度の改善」を受領
3/31	日本コントラクトブリッジ連盟より寄付金10万円受領
4/03	(財)ユネスコ・アジア文化センターより2008年度事業「報告書」を受領
4/06	日本イコモス国内委員会研究会「Herb Stovel氏（現 カナダカールトン大学教授、元 パリ本部イコモス事務局長）講演会 "Current challenges in Managment of the World Heritage Convention and implications for the role of ICOMOS"」開催（於 アネックス）
	京都大学大学院地球環境学舎より、「環境マネジメント専攻修士課程平成19年度インターン研修成果報告書集」を受領
4/17	文化財保存支援機構より「JCP NEWS No.19 2009.3.30」を受領
4/20	(財)ユネスコ・アジア文化センターより「文化遺産ニュース vol. 20」を受領
4/24	文化遺産国際協力コンソーシアムより「第3回総会（2009.3.26開催）資料」「文化遺産国際協力事業 紹介冊子【日本語版・英語版】」を受領
5/01	東京文化財研究所　文化遺産国際協力ｾﾝﾀｰより「文化庁委託　四川震災復興に係る文化財協力（専門家交流）事業　文化財建造物等の地震対策に関する日中専門家ワークショップ報告書 2009年3月」を受領
	国立歴史民俗博物館より企画展示「日本建築は特異なのかー東アジアの宮殿・寺院・住宅ー」プレスリリースを、筑波大学人間総合科学研究科世界遺産専攻「地域再生と観光戦略プロジェクトニュース 第8号」を受領
5/18	(財)ユネスコ・アジア文化センターより「ACCU news no. 373、 2008.5月号」を受領
5/19-24	ルーマニア トランシルヴァニア地方にて開催されたCIAV annual meeting "The Vernacular and the multicultural dialogue" に前野まさる委員長が参加
5/16-22	第5小委員会の石井昭顧問・蕪　和善氏・矢野和之事務局長が、ブルガリア・プロヴディフ現地視察およびブルガリアイコモスと協議
5/26	(財)民族芸術交流財団主催が開催（於 東京 JCBホール）した「日韓芸術交流イベント～伝えよう、すばらしい世界遺産～チャン・ヒョク氏 in 熊野古道」に於いて日本イコモスが特別協力したことでチャン・ヒョク氏より当財団を通じ日本イコモス国内委員会に寄付金をいただいたことに杉尾邦江理事からチャン・ヒョク氏へ感謝状を送呈。

日本イコモス国内委員会　維持会員（代表者）

株式会社　尾田組（尾田芳信）
株式会社　都市環境研究所（矢嶋啓自）
株式会社　プレック研究所（杉尾伸太郎）
株式会社　トリアド工房（伊藤民郎）
西武建設株式会社（大澤茂治）
北野建設株式会社（北野貴裕）
株式会社　小林石材工業（小林美和）
テック大洋興業株式会社（鳥潟浩司）
株式会社　鴻池組（玉井啓悦）
株式会社　乃村工藝社（乃村義博）
株式会社　文化財保存計画協会（矢野和之）
「国宝松本城を世界遺産に」推進委員会（菅谷　昭）
株式会社　京都科学　（片山　保）
「善光寺の世界遺産登録をすすめる会」（仁科恵敏）
株式会社　丹青社（渡辺　亮）

（敬称略・順不同）

日本イコモス国内委員会の活動には以上の企業・団体のご支援をいただいております。

●日本イコモス国内委員会　理事会　JAPAN-ICOMOS EXECUTIVE BOARD

President	委員長	前野　まさる	Masaru MAENO
Vice President	副委員長	杉尾伸太郎	Shintaro SUGIO
		西村　幸夫	Yukio NISHIMURA
Secretary General	事務局長	矢野　和之	Kazuyuki YANO
Trustees	理　事	赤坂　　信	Makoto AKASAKA
		小野　　昭	Akira ONO
		河野　俊行	Toshiyuki KONO
		黒田　乃生	Nobu KURODA
		清水　真一	Shinichi SHIMIZU
		杉尾　邦江	Kunie SUGIO
		鈴木　博之	Hiroyuki SUZUKI
		田中　哲雄	Tetsuo TANAKA
		田辺　征夫	Yukio TANABE
		西浦　忠輝	Tadateru NISHIURA
		濱崎　一志	Kazushi HAMAZAKI
		益田　兼房	Kanefusa MASUDA
		宮城　俊作	Shunsaku MIYAGI
		渡邊　保弘	Yasuhiro WATANABE
Auditors	監　事	沢田　正昭	Masaaki SAWADA
		前田　耕作	Kosaku MAEDA
Advisors	顧　問	石井　　昭	Akira ISHII
		伊藤　延男	Nobuo ITO
		坪井　清足	Kiyotari TSUBOI

小委員会　WORKING GROUPS

Chiefs	主　査	藤井　恵介	Keisuke FUJII
		稲葉　信子	Nobuko INABA
		石井　　昭	Akira ISHII
		三宅　理一	Riichi MIYAKE
		益田　兼房	Kanefusa MASUDA
		西村　幸夫	Yukio NISHIMURA
		崎谷　康文	Yasufumi SAKITANI
		窪寺　　茂	Shigeru KUBODERA

●国際諸委員会参加者　REPRESENTATIVES TO INTERNATIONAL COMMITTEES

Executive Member	岡田　保良	Yasuyoshi OKADA
Advisory Committee	前野　まさる	Masaru MAENO
ISC on:		
Archaeological Heritage Management	小野　　昭	Akira ONO
	岸本　雅敏	Masatoshi KISHIMOTO
Analysis and Restoration	花里　利一	Toshikazu HANAZATO
	坂本　　功	Isao SAKAMOTO
	西澤　英和	Hidekazu NISHIZAWA
Historic Towns and Villages	福川　裕一	Yuichi FUKUKAWA
	上野　邦一	Kunikazu UENO
Underwater Cultural Heritage	荒木　伸介	Shinsuke ARAKI
Training	稲葉　信子	Nobuko INABA
	工楽　善通	Yoshimichi KURAKU
Cultural Landscapes	杉尾伸太郎	Shintaro SUGIO
	本中　　眞	Makoto MOTONAKA
Vernacular Architecture	前野　まさる	Masaru MAENO
	大野　　敏	Satoshi OHNO
Wood	伊藤　延男	Nobuo ITO
	渡邊　保弘	Yasuhiro WATANABE
Earthen Architecture	岡田　保良	Yasuyoshi OKADA
Cultural Tourism	宗田　好史	Yoshifumi MUNETA
	石井　　昭	Akira ISHII
Legal Issues	河野　俊行	Toshiyuki KONO
Heritage Documentation	山田　　修	Osamu YAMADA
Cultural Routes	杉尾　邦江	Kunie SUGIO
	大野　　渉	Wataru OHNO
Stone	西浦　忠輝	Tadateru NISHIURA
	石崎　武志	Takeshi ISHIZAKI
Risk Preparedness	益田　兼房	Kanefusa MASUDA
Rock Art	小川　　勝	Masaru OGAWA
	五十嵐ジャンヌ	Jannu IGARASHI

JAPAN ICOMOS/INFORMATION
Vol.7, No.10 10 JULY 2009
日本イコモス国内委員会　委員長　前野まさる
事務局担当理事　矢野和之　　編集　赤坂　信
〒101-0003　東京都千代田区一ツ橋2-5-5　岩波書店一ツ橋ビル13階
株式会社　文化財保存計画協会　気付
Tel & Fax: 03-3261-5303 e-mail: jpicomos@japan-icomos.org
http://www.japan-icomos.org/

JAPAN-ICOMOS National Committee Secretariat
c/o Japan Cultural Heritage Consultancy
Hitotsubashi 2-5-5-13F, Chiyoda-ku, Tokyo 101-0003, Japan
Tel & Fax: +81-3-3261-5303 e-mail: jpicomos@japan-icomos.org
http://www.japan-icomos.org/